

旬じょうはん

情勢判断学会 東京本部
会員向けニューズレター
発行人 古川 彰久
事務局 〒252-0321 神奈川県
相模原市南区相模台 1-23-9
Tel.&Fax.
042-748-8240
<http://www.jouhan.com>
E-mail: info@iki2life.com

2 月例会ご案内

2 月 8 日 木曜日 18:30 ~ 21:00
テーマ : 北朝鮮情勢をどう見るか
場所 : 港区商工会館
参加費 : 1000 円
担当 : 篠原 昌人

北朝鮮の核兵器開発、度重なる長距離ミサイルの発射は、安倍内閣をして戦後最大の国難と言わしめました。安倍政権はこれを前面にうち出し、去年の総選挙では見事？大勝を博したのです。

では政府は、北朝鮮に対してどういう対策を執ろうとしているのか。これは、どうもわかったようで、よくわからないというのが実情です。口を開けば、「国際社会と協力して最大限の圧力をかける」と出てきます。

“圧力”というのは主として経済制裁ですが、これを以て核兵器開発をあきらめさせるといふわけです。かつてココムという組織が西側(懐かしい響きとなりました)にはあり、共産圏への輸出を規制していました。北朝鮮への経済制裁は、一国を対象にした厳しいココムと言えましょう。でもこれで核兵器開発を断念させることができるのか(北は核兵器を持っていると公言している)。根本的に一国の政策に他国が介入できるのか、という問題があります。

目下の最大の焦点は、アメリカと北朝鮮との軍事衝突です。果たして軍事行動はあるのか。それが本格的な戦争にまで発展するののかということです。事前の話合いも何もなく、いきなり開戦というのは考えにくいのですが、大手月刊誌の記事タイトルを見ると三月にも開戦という文字になっています。今のところ米朝二国の武力衝突がクローズアップされていますが、これは自動的に第二次朝鮮戦争に結びつきます。自明のことですが、アメリカと韓国は同盟関係にあります。この関係は日米安保より強く、戦時体制を採っているのです。両国は平時から、つまり戦争状態になくとも連合司令部を設けており、アメリカ軍の将官が指揮官となっています。同盟国の一国が攻撃されれば、自動的に(そのタイミングは様々でしょうが)参戦する構造になっているのです。それなのに、どういうわけか米朝二国だけの問題に限定される印象なのは、トランプ

大統領のパフォーマンスの故でしょうか。

集団的自衛権を容認した日本は、半島有事にどう対応することとなるのか。日米安保は米韓とは異なり、平時には、つまり今現在では両国合同の司令部というものを置いていません。日本が攻撃された時、確か共同指揮所を設けることになっていたと思います。どちらが主導権を執るのかは明確ではなく、連絡調整しながら進めることになっています。半島有事は日本が戦場ではないとすれば、共同指揮所は作られないでしょう。日本は全力でアメリカの後方支援を行うことになるでしょう。作られるとすれば、北が日本国内の米軍基地を攻撃した場合です。

北朝鮮の軍事力増強に対抗するため日本が採るべき方策も重要です。北の核兵器にどう対処すべきか。これには三つが考えられます。核には核というのが単純明快ですが、これは単純ながら真理であることは事実です。第二次大戦後の冷戦はこの政策でした。ですがこの他にも二つあるのです。今こそ発想の転換が必要です。アメリカ式の最新兵器を買いこむよりも、専守防衛という根本政策から為すべきことがある筈です。

何らかの軍事衝突を前提にして言われる事柄に、北の難民問題があります。戦争になったら北から多くの難民が日本に押し寄せる、というものです。面白いのは北の難民であって、南から、韓国から難民が来るとは言われません。南北が戦争になると、なぜ北から来るのか？日本に近い筈の南からは何故来ないのか。そもそも難民がそんなに日本にやって来るのか、という疑問があります。以前の朝鮮戦争の時はどうだったのでしょうか。北にしる南にしる、船か何かで日本にやってきたという事実は、まあないようです。今になって何故なのか。これは戦争になったら、北朝鮮は崩壊する、という予想から来ているようです。北の崩壊とは、丁度二十年ほど前、金日成死亡のあたりから盛んに言われ出したことです。それこそソ連崩壊、東欧諸国の体制変換も与って作用したのかもしれない。一時は南が北を吸収するのは時間の問題、とさえ喧伝されたものです。しかし依然として北朝鮮は安泰？なのです。開戦の可能性、日本の対応、半島の将来について私見を述べようと思います。

12月例会報告

12月14日 木曜日 18:30 ~ 21:00

テーマ : 「森 政弘」氏について第2回

場所 : 港区商工会館

担当 : 自由討論

榎原氏が10月の例会で、森 政弘氏の考えをその著書「矛盾を活かす超発想」から引用され、お話しされたことで森 政弘氏への関心が高まり、そのお考えを掘り下げるようになった。

森 政弘氏について、現在の科学の最先端の分野であるロボット研究において我が国の第一人者でありながら、仏教者として心の問題を提起しておられることに興味を持った。

11月例会では、森 政弘氏の以下の著書を読んだの要約が報告された。

1. 古川彰久氏は、『「退歩を学べ」ロボット博士の仏教的省察』
2. 石田金次郎氏は、「親子のための仏教入門…我慢が楽しくなる技術…」

更に森 政弘氏のお考えを掘り下げるべく12月例会にも意見交換を行うようになった。

まず、古川彰久より、森 政弘氏がロボットと人間の意識との関わりをどのように受け止めているのかを知りたくて「ロボット考学と人間—未来のためのロボット工学—」を読んでみましたとし、以下のような報告があった。

要旨

序章 「ロボット考学」とは何か

「ロボット工学」のほうはあくまでも工学、つまりロボットを設計したり作ったりするための技術に関する、物理的な学問だが、「ロボット考学」は、ロボットについての技術という範囲だけに留まらずに、幅をうんと広げて、人間存在とは何かということにも密接に関連しながら、ロボットに関係した心理的な論議や哲学的考察までも射程に含めたものである。

「人間から学んでロボットを作る」のだが、これには限界があり、「ロボットから人間を学ぶ」という姿勢が肝要であり、更には「ロボットに人間が育てられる」という状況を作り出すのである。

第1章 自然と人間から学ぶ、ロボット工学—ロボットの設計思想—

「カニから学んだ骨の形」: 自然の見事さ、不思議さ

「右と左」: 自然は底知れず神秘である

「ロボットに演奏させる意味」: プロセスも結果もともに大切

「指の機能」: 機能の多様性—創造主の偉大な設計理念

「寸法体系とロボット」: 介護・家事ロボットとモジュール

「すき間のない機械」: 動物の身体では、諸器官がびっしりとすき間なく詰まり、すべてが生理的な役割と機能を担っている

「周辺視野と中心視野—あいまいな全体把握の大切さ」: 人間は無意識のうちに、常に全体の中での位置づけを行いながら生きており、さもなければ五里霧中、暗中模索のきわめて不安な状態の陥ってしまう
主客の対立を超え統一体を形成する

第2章 ロボットから考える、人間というもの—ロボットの哲学—

「ロボットに対する人間の認識—ロボットは第三の特別なものか」

「ロボットと顔」

「意識とロボット」

「ロボットと自己」

「ロボットと煩惱」

「ロボットと所有」

第3章 ロボットの世界—ロボット独自の発展を考察する—

「時間・空間・第三の間」

「ロボットと時間観念」

第4章 設計への警告—幸せとは何か—

「自動化して良いことと悪いこと」

「賢明な自動化と愚かな自動化」

「人間型ロボットの人間以上の効果」

「ロボット工学と退歩」

「食欲と足るを知る心」

「不気味の谷現象発見」

「目的とプロセス」

「今日の技術の問題点」

「複雑化への警告」

第5章 ロボコンに学ぶ—「技道」の哲学—

「ロボコンと技道」

「金剛経とロボコン」

「ロボットから習う—向こうから来るのがよい—

「第25回目を迎える高専ロボコン」

「ロボコンを超えたロボコン」

「ロボコンと評価」

第6章 ロボット工学者へ—創造的な研究のために—

『『ロボットは総合』の意味』
「古人の跡を求めないロボット」
「形相工学とロボット」
「ロボットと個性」
「指が示す宇宙の重層構造」
「個と全体・中枢と無中枢」
「性格の先天性と後天性」
「技術をまねる条件」
『『なる』と『する』』

以上、「ロボット考学と人間—未来のためのロボット工学—」の要旨を書き出したが、この本は森 正弘氏がこれまで実践されてきたことをまとめられたものと言える。

これまでの私たちの意見交換の中で、大きな課題の一つはロボット科学者の森 正弘氏がどうしてこれだけ仏教に傾倒されたのかということであった。

この点に関しては、この本の序章の最初にあるように、「ロボット工学」のほうはあくまでも工学、つまりロボットを設計したり作ったりするための技術に関する、物理的な学問だが、「ロボット考学」は、ロボットについての技術という範囲だけに留まらずに、幅をうんと広げて、人間存在とは何かということにも密接に関連しながら、ロボットに関係した心理的な論議や哲学的考察までも射程に含めたものである。
とのことである。

この様に森 正弘氏がロボットの研究を深めていくとロボットの元になっている人間とは何かという哲学的な考察が必要になり、それに対して仏教が有する哲学的な視点が役に立つということのようです。

榊原氏から科学者と仏教哲学ということでは、中山正和氏という先達がおられるということで1月例会にて榊原氏から中山正和氏についてお話をいただくことといたしました。

